

長丁実験体験教室 3月 テーマ（日本人と縁起物と御守） 東小（R6・3月4日（月）11日（月）

（1） 目的

古来から庶民の生活は季節の変化に敏感で、一緒に暮らす動植物を自然の中で一緒に生活する仲間として大切にしてきました。その表れの一つとして動植物の生態などをから縁起物や御守を作りだし、心のよりどころとしてきました。人々が大切にしたい御守と動植物の関係を調べて、自分に適したオリジナルの御守を作ってみよう。

（2）人と自然との関わり合いについて考えてみました。

年配の人々から受け継いできた考え方の中に、自然万物や現象には何らかの役割を持った八百万の神（やおよろずのかみ）がいると教わってきました。（平成の中学生調査でも約4割の生徒が祖父母から教わっている）自然と上手に付き合ってきた農耕民族ならではの日本人らしい発想から生まれた考え方かもしれません。正月の輪飾りも（平成の中学調査で約4割の家で飾った）その一例ではないだろうか。しかし、日本人の生活スタイルの変化とともに、消えつつある考え方や行事の1つかもしれません。また、日本人は自分と関係のない海外の宗教や様々な考え方の人々に対しても同じ仲間として、寛容な気持ちで受け入れるおおらかな民族ともいえる。クリスマスなどはその一例ではないだろうか。海外にはない独特の文化が小さな島国で築かれてきました。

\* 八百万の神とは、天体・気象現象・地形や岩石・動植物・場所（台所・トイレ・かまど等）あらゆるものが神（3）  
動植物の縁起物や御守がなぜできたのか考えてみました。

自然現象など、人間の力では太刀打ちできない。



理解しがたい自然現象におののく庶民の秩序を保つために人々は神様を作ったのかもしれない？

人は未熟児で生まれ、自分を取り巻く環境の影響を大きく受けて人間形成される

成長とともに活動範囲が広がる → 努力しても成しえない困難が増える

神様の分身の御守を身に着けることで自信をもって行動できるようになった。自分が御守を身に着け、慎重に行動したので、結果的によい成果が出た。

御守のおかげではなく、自分自身の努力によって成し得たことを忘れてほしくないですね。

- ・ 生き物を分身にすることで仲間意識が芽生え変化がわかりやすいので、自分の行動がしやすくなったのではないかな
- ・ 身近な動植物などが神様なので、親近感がわき庶民の意思疎通ができて個人のわがままや欲が減ったと考えられたのでは
- ・ 分身は、各地域で異なり都合の良いこじつけの解釈がなされている。
- ・ 分身の動植物を守ることは、地域の環境を大切にすることにつながり暮らしやすくなったと思われる。

自然物のお守りの例・・・自然の中に大黒様を発見した人の感性は豊かだったと思います。



カラスウリの種子は黒く、乾燥すると金色っぽくなり、形が大黒様に似ていることから、財布に入れておくとお金がたまる言い伝えがある。



カシワの葉：新芽が出るまで葉が落ちないことから世代が引き継がれる縁起の良い木として、旧家の庭によく植えられている木の一つ。年輪を見ると「桜の花びら」のように見えることから、「受験の御守」トンボは、前進のみでバックしないことから「勝ち虫」、富士山は「立身出世」、大黒様は「勝運の神様」などがある。



ナギは、古来より、災難除け・交通安全・大願成就・受験合格・福運招来・願掛け、縁結び〈葉がちぎれないことから〉等のお守りで、祈願に使われました。

◎伊豆山神社のご神木でもあり、熊野神社のお守りにもなっています